

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	長崎県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	波佐見町立波佐見中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	6	6	6	1	19	38
生徒数	226	214	227	2	669	

研究の概要

1. 研究主題

「確かな学力向上のための実践研究」 - 個に応じた指導の工夫改善 -

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

- ・ 1, 2年生・数学
生徒の理解度に差が出やすい教科であり, 学年であるため。
- ・ 2年生・理科
生徒の理解度に差が出やすい教科であり, 生徒の学力が他学年に比べて低かったため。
- ・ 1, 2年生・英語
生徒の理解度に差が出やすい教科であり, 学年であるため。

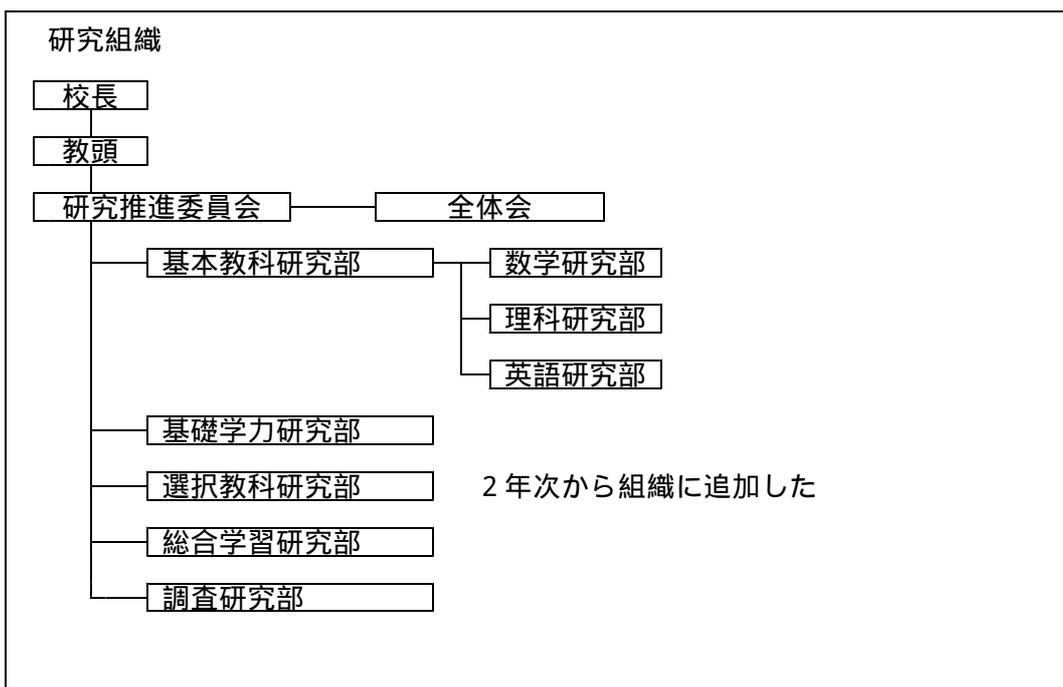
(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ 「確かな学力向上のための実践研究」- 個に応じた指導の工夫改善 -</p> <p>仮説 各教科において, 個に応じた指導のための評価計画の基に, 少人数授業・習熟度別指導など, 個に応じたきめ細かな指導を行えば, 基礎・基本や自ら学ぶ力が身につくであろう。また, 選択教科において発展的な学習など多様なコースを開設すれば, より一層個を伸ばすことができるであろう。</p> <p>研究内容・方法 〔研究内容〕 発展的な学習や補足的な学習など個に応じた指導のための教材の開発 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 生徒の学力の評価を生かした指導の改善 〔研究方法〕 本校では「確かな学力」を以下のようにとらえている。 1. 教科の学習を支える基本的な生活能力(見えない学力) 2. 各教科の基礎的・基本的内容(学習指導要領に示されている最低基準) 3. 生きる力(総合的な学習の時間) このうち, 2を本研究の柱とし, 基本教科(数学・理科・英語)を中心とした授業実践を行う。1と3については, 本研究を支えるものとして位置づける。 * 授業実践では, 単元の指導計画を中心にすすめる。</p>
--------	--

平成 15 年度	<p>テーマ 「確かな学力向上のための実践研究」- 個に応じた指導の工夫改善 -</p> <p>仮説 各教科において、個に応じた指導のための評価計画の基に、少人数授業・習熟度別指導など、個に応じたきめ細かな指導を行えば、基礎・基本や自ら学ぶ力が身につくであろう。また、選択教科において発展的な学習など多様なコースを開設すれば、より一層個を伸ばすことができるであろう。</p> <p>研究内容・方法 〔研究内容〕 発展的な学習や補足的な学習など個に応じた指導のための教材の開発 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 生徒の学力の評価を生かした指導の改善 〔研究方法〕 基本教科(数学・理科・英語)を中心とした授業実践を行う。 * 授業実践では、単元の指導計画を中心にすえる。</p>
----------------	---

平成 16 年度	<p>テーマ 「確かな学力向上のための実践研究」- 個に応じた指導の工夫改善 -</p> <p>仮説 各教科において、個に応じた指導のための評価計画の基に、少人数授業・習熟度別指導など、個に応じたきめ細かな指導を行えば、基礎・基本や自ら学ぶ力が身につくであろう。また、選択教科において発展的な学習など多様なコースを開設すれば、より一層個を伸ばすことができるであろう。</p> <p>研究内容・方法 〔研究内容〕 発展的な学習や補足的な学習など個に応じた指導のための教材の開発 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 生徒の学力の評価を生かした指導の改善 〔研究方法〕 全教科において授業実践を行う。 * 授業実践では、評価の研究及び選択の授業研究を中心にすえる。</p>
----------------	---

(3) 研究推進体制



研究体制の工夫

数学において、全18クラス54単位時間を5名の教師で担当する。年間を4期に分割し、1・2期の15週は第1学年において2クラスを3人の教師で持ち、3コースにおける習熟度別学習に取り組む。本校ではこの学習形態のことを2C3T3Rと表現している。3・4期の20週は、第2学年に対して、同様の習熟度別学習を实践する。また、第2学年の1・2期は、1C2T2Rを週単位3時間のうち、2時間実施し、1時間については一斉授業を行う。

第1学年の2C3T3Rにおける習熟度別学習においては、基礎をじっくりと身につける「じっくり理解コース」と、演習問題を増やし確実に力をつける「バリバリ練習コース」、教科書で学習したことをもとにさらに力をつける「チャレンジ発展コース」の3コースを設ける。

第2学年の2C3T3Rにおける習熟度別の学習においては、基礎をじっくりと身につける「じっくり基礎コース」と、しっかりと理解を深めて確実に力をつける「しっかり理解コース」、教科書で学習したことをもとにさらに力をつける「チャレンジ練習コース」の3コースを設ける。

コースの決定に関しては、1単元の中で、最初にガイダンス、節ごとに小テストや確認テストを実施して自己採点の結果をもとに生徒が自分でコースを選択するようにする。この方法で自己評価力を高めることも一つのねらいとする。

理科において、全18クラス50単位時間を4名の教師で担当する。2年生の全6クラスを、年間を通して1C2Tで行う。

単元の指導計画には、習熟度別学習、課題選択学習などを位置づけるが、教科の特性上グループ学習を主な指導方法とする。

学習過程においては、日常の体験から導かれる授業前の見方や考え方が授業に大きく影響を及ぼすことをふまえて、レディネステストを行う。これにより、生徒の素朴概念と矛盾するような事象を導入に取り入れた授業を計画する。さらに学習シートを用意し、特に主体的な学びのために「予想(理由も含めて)」を書かせて、自分なりの考えを持たせる。そして、予想を確かめる実験を各班ごとを実施し、「考察」で自分の考えたモデルが妥当であったかを検証させるという授業を構成する。このような授業によって新しい概念が獲得されたかどうかは、小テスト、単元末テストなどを通して評価していく。

英語において、全18クラス54単位時間を5名の教師とALT1名で担当する。年間を4期に分割し、1・2期の15週は第2学年で、3・4期の20週は第1学年で、1C2Tで行う。単元の指導計画には、少人数、習熟度別などの学習方法を位置づける。

単元の学習の1時間目は一斉授業で行うが、2時間目以降は、1クラスを等質の2グループに分けた少人数で、本文の学習及び表現活動を行う。単元の最後の習熟度別学習では、基礎コース(イーストコース)と発展コース(ウエストコース)の2コースに分け、個に応じた教材で学習を進める。基礎コースでは単語や文型のドリル学習を徹底して行い基礎学力を定着させることをめざし、発展コースでは基礎を踏まえさらにステップアップした内容で表現力をつけることを目指す。また、学習意欲を高めるために、両コースでALTが授業できるように、指導過程を工夫する。

単元のはじめと終わりにプレテスト、ポストテストを実施する。

基礎学力定着のための取り組みの一つとして、毎週水曜日の朝自習時間を「マンツーマン指導」の時間として位置づけ、生徒の希望者を対象に、原則として1人の生徒に1人の教師がついて指導する。

選択教科において、基礎・基本の定着のための補充学習と、個人のよさを伸ばすための発展的な学習をできるだけ組み込むために、今年度は総合的な学習の時間を下限でとり、選択教科の時間を上限で実施する。

平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

数学科の成果

・コース別学習において、最初はコース選択がうまくできなかった生徒も、しだいに自分に適したコースを選択することができるようになった。また、学習意欲が見られ、発言や質問も多くなり、より多くの生徒の学習に反映することができた。（「数学が好き」、「やや好き」をあわせて64%、全国平均は44%。「数学の授業がわかる」と答えた生徒が66%、全国平均は50%。「わからない」と答えた生徒が4%、全国平均は14%）

・3コースの進度をそろえるために、常時教師間で意見交換や生徒理解などの情報交換を行ったので、途中でも生徒がスムーズにコースを変更することができた。

理科の成果

・単元指導案を作成することによって、単元全体を見通した評価と指導の一体化を目指した授業を実践することができた。特に小テストを授業の中に計画的に配置し、形成的評価の資料とすることで、個に応じた指導をすることができるようになった。（88%の生徒が小テストは効果的だと感じている）さらに理科担当職員が授業に取り組むための共通理解を図ることができた。

・学習過程に予想や仮説を考えたり、それに基づいて実験方法を計画させるなどの場面を仕組んだことにより、常に見通しを持って授業に参加するようになってきた。（自分の考えで予想をして実験や観察をしている生徒が79%、全国平均は43%。理科を勉強すれば疑問を解決したり予想を確かめたりする力がつくと意識している生徒が65%、全国平均は50%）

・単元指導案の中にT1、T2の役割を明確に示すことによって、T2が遠慮することなく授業にかかわり、遅れた生徒や疑問を持っている生徒に効果的に助言をすることができた。

英語科の成果

・2年生の過去形の学習において、単元のはじめと終わりにスピーキングテストによるプレ・ポストテストを行った。その結果、Cレベルの生徒が10%減少し、Aレベルの生徒が2倍以上に増えた。また、全体的に話すスピードが速くなり、語順が定着した。

・2年生の未来形の学習において、ライティングに重点を置いて指導し、プレ・ポストテストを条件付英作文で実施したところ、ポストテストでは、肯定文・否定文ともにAレベルの生徒が増え、その分Cレベルの生徒が減少した。

〔生徒の感想〕

T1

・先生が2人いると質問しやすい。
・ロールプレイなどで物語の内容がわかりやすい。

少人数学習

・発表や質問がしやすい。
・発表回数が増え、よく理解できた。
・少人数だと間違えても恥ずかしくない。

習熟度別学習

・自分にあったレベルで学習できる。
・自分と同じレベルの人ばかりで質問しやすかった。
・自分のペースで学習できるのでじっくり取り組めた。

マンツーマン指導の成果

各学年とも10名前後の生徒が、毎週水曜日の朝は特別教室でマンツーマン指導を受けている。（その他の生徒は自分達の教室で自習）内容は計算問題が中心で、小学校3年生のレベルから中学生レベルまで順番にレターケースに並べられたプリントを、生徒が自分で選択して解いている。九九がまだ身につけていない生徒もあり、教師が横についてアドバイスしたり、ストップウォッチで時間を計ったりして支援している。

〔生徒の感想〕教室でするときは、1人で取り組むのでわからないことが多い。先生に一つ一つ教えてもらって楽しくできて、わかるようになって嬉しい。やる気が出てきた。

〔教師の感想〕教室ではなかなか細かい指導ができず、意欲的に取り組ませることができなかった。別教室で横にいて、何が理解できていないのかよくわかった。また、コミュニケーションをとりながらゆっくり取り組ませると、それが一つ一つ生徒の自信につながっているように感じる。できた喜び、わかる喜びが目に見えてわかる。

選択教科については、今年度は条件を整えたに過ぎない。

2. 今後の課題

3教科から全教科に広げる
研究内容
選択教科を中心とした補充・発展学習のあり方
評価のあり方
必修教科における基礎・基本の定着
研究組織の変更(9つの教科部会と*3つの研究部会)
*選択教科研究部, 評価研究部, 基礎学力研究部

学力把握のための学校としての取組

学力調査・意識調査の実施
(1)ねらい
生徒の学力の実態を把握し, 各教科でこれまでに仕組んできた学力向上の手立ての有効性を評価し, 授業改善に役立てる。
(2)実施教科と学年について
2・3年数学
2・3年理科
2・3年英語
(3)実施時期
学力テスト; 平成15年4月
意識調査 ; 平成15年7月

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

研究発表会開催 日時:平成15年11月5日
場所:波佐見町立波佐見中学校
テーマ:「確かな学力向上のための実践研究」
- 個に応じた指導の工夫改善 -
対象:全ての教職員
内容:公開授業, 研究協議等
Webページの作成
<http://www.town.hasami.nagasaki.jp/juniorhigh/>
フロンティアティーチャーとしての研究成果普及のための活動実績
・佐世保地区学力向上推進協議会実務担当者会における実践報告
(平成15年6月4日)
・平成15年度長崎県中学校教育課程研究協議会全体会における実践発表
(平成15年8月1日)
・長崎県教育研究協議会発行月刊誌「教育ながさき」平成16年4月号への掲載
研究発表会后, 他郡市の教育事務所や他県の教育委員会, 小・中学校からの視察があった。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無